

日本住宅の伝統的な住生活について

——住宅とかかわる生活行為の歴史的変遷と他国との比較による考察(その2)——

A Comparison of Traditional Japanese Housing with Foreign Countries —— Life-Style in Housing (part 2) ——

川嶋 幸江*

Yukie Kawashima

1. 研究の背景と目的

住居の中で毎日繰り返される日常的行為はあたりまえすぎて、どういう意味や目的があるのか、どんな方法があったのか、あまり考えたりしない。何の変化もなくずっと続いてきたような気がしている。

1992年にこのタイトルで1) 履物を脱ぐ、2) 床に座る、3) 床に寝る、といった伝統的な日本の生活習慣である動作や行為を、歴史をさかのぼりまた、他国との比較をしながら考察した。

これは、日本の床座の生活と欧米の椅子座の生活の検証でもあった。

そこから得られたものは日本の生活習慣が欧米化されたことによって住宅の間取りや形が大きく変化したと考えられている。

そのうえ、住宅の狭さによって、季節によって、また、健康保持の面で、椅子やベットを使ったり使わなかったりして、別の新しい日本の生活習慣が編み出されているようである。

確かに、椅子やベットといった欧米の家具が家庭内で日常的に使われるようになったことによって生活が変化し、それについて住宅の外観や部屋の並べ方(パブリックスペースとプライベートスペースに分離)や部屋の使い方(多目

的な使われ方でなくなり、食寝分離といった目的がはっきりした部屋のつかわれかた)に変化した。

しかし、日本人は履物を脱ぐ習慣を変えなかったし、これからも未来永劫変えないことは確実である。それによって、床にじかに座ることも、床にじかに寝ることも完全に消滅せずに残っていくと考える。

日本の生活習慣を大幅に変えてしまった第二次世界大戦以降50年を経た今日、変わっているようで、変わっていない住まいとかかわる動作や行為についてさらに検証を試みることで、住宅が和でもない、洋でもない、しかし、日本人にとって心理的にも生理的にも心地よい新しい形が誕生しているのかどうか追求し、改めて検証しようと考えた。

2. 研究方法

今回は入浴という行為について調べる。しかし、何分にもあまりにも日常的過ぎて記録があまりない。ことに日本以外の国々に関する文献が少なく、筆者の体験や知人の体験などをたずねて現在行われている入浴方法から過去を類推してみるというような試みもしてみる。入浴という行為によって造られる浴室の形、使い方

*住居学科

が過去から現在までどのような変化をたどったか。また、外国と比較して文化の違いがはっきりでてくるのか。日本式入浴文化が21世紀に向かってますます盛んになっていくのではないかなど、それには、従来通り、文献調査を中心にしてまとめる。

3. お風呂に入る

日本人なら誰でも身体が汚れたり、汗をかいたりしたときはもちろんのこと疲れを癒したいときやリラックスしたいときなど「お風呂に入る」とか「お湯に入る」と言ういいかたで入浴する。

日本の地理的条件は温帯気候に属しているが、湿気が多く温度の高い夏はほとんど亜熱帯気候と言ってもよいほどである。さらに、火山国という条件によって日本のありとあらゆる場所から温泉や鉱泉が噴出したり、掘り当てられたりしている。温泉に含まれている元素の薬効によって、病気が治癒するということがあってよけい入浴に関心が向かう。

夏は動かずにじっとしていても、汗をかく日が多いため毎日入浴しないと収まらない。汗をかいた後のさっぱりした入浴感は何にも勝る醍醐味である。冬は冬でお湯の中で体を芯まで暖めて寝ると暖房のきいていない部屋であっても暖かくぐっすり寝ることができる。

このように、日本に生まれ育った者にとって、お風呂に入る行為は体を清潔に保つばかりでなく、暖房の代わりでもあった。

更に、重要なことは心身のリラックスと活性化をはかったり、健康保持や、ときには病気を治す効果があるといったことを誰もが知っているのである。

過去にさかのぼってみても日本では入浴の習慣は連綿と続いている。それに反して西欧では入浴の習慣が盛んな時代もあればすっかり廃れてしまっている時代があったりする。

まず、歴史的な変遷の違いから検討したい。

〔1〕入浴の歴史《日本編》

(1) 入浴のはじまり

そもそも、人間が入浴するようになった理由として、1) 宗教上、2) 病傷の治療および予防、3) 保険衛生上、4) 精神衛生および娯楽上など、四つの原因が考えられる。

1) 宗教上

① 神道

お湯に浸かる沐浴は原始神道の昔より神霊に対す拝礼や祈祷に際して、身を清めめるために、禊(ミソギ)として神事を行う前に川や海で体を洗い清めたのである。

また、湯灌(ユカン)といって、死者を納棺する前に死体を清める沐浴は斎川浴(ユカワアミ)という古い読み方が語源になっている。斎はユとよみ、「汚れを避けて身を浄め慎む」という意味で、水の温冷は二次的であった。

時代が下がるにつれて、禊は主に浴室で行われようになり、宮中では「お湯殿の儀」という儀式として形式化していった。

② 仏教

斎戒沐浴(サイカイモクヨク)といって、心の不浄を浄め、身の過ちを戒め、飲食・動作をつつしみ、湯水によって心身を清めることで、法会を行う前に温堂で身を清めたのである。

仏教では仏教伝来と同時に經典の「仏説温室洗浴衆僧經」に功德として、「七病を除き、七福を得る」ということで、潔斎と保健衛生上からの必要性が述べられている。

◆七病 ①四大安穩(一切の物体を構成する地・水・火・風の四元素が無事であること)

②除風病(風邪の予防)

③除湿

④除寒水

⑤除熱気

⑥除垢穢

⑦身体輕使、眼目精明。

◆七福 ①四大無病、所生常安、武勇長丁健、衆所敬仰

②所生清浄、面目端正、塵水不著、人

所敬仰

③身体常香，衣服潔淨，見者歡喜，莫不恭敬

④肌体濡沢，威光德丈，莫不敬嘆，独歩無双

⑤多饒人從，扨拭磨垢，自然受福，常識宿命

⑥口齒香好，方白齋平，諸説教令，莫不庸用

⑦所生之處，自然衣裳，光飾珍宝，見所悚息

この七福に関して、江戸時代には「風呂に七種の徳あり。垢をさり、みめをよくし、はをつよくなし、目をあきらかになし、口中にうるほひあり、気をはらし、風をのぞく也」と經典のいっている言葉をやさしく言い直して解説している。また、入浴の効果について、保健衛生を保ち、容姿端麗となり、人に崇敬されると述べている。

◆施浴 大寺院では寺僧の入浴後に参詣者や近隣の人々に無料で温堂を開放したことをいい、社会福祉的色彩を強め、仏教の布教手段として相当な利点があった。特に、光明皇后（701～760年）の施湯の伝説説話は有名である。

過去から現在にいたる日本人の入浴にたいする強い愛着をもった習慣は身分の上下や貧富の差を問わず施浴の恩恵に浴したことで、だんだんと身につけていったと考えられ、まさしく、仏教伝来による寺院の浴堂によって植え付けられたといっても過言ではない。

2) 病傷の治療および予防

傷ついた動物や鳥などが温泉につかって治癒した伝説が残っていたり、その実際の現場を見たりしたことで人間もそのまねをして病気が治ったため、その効用が一般的に広がった。また、普通の水や湯でも体を清潔にすることは健康を保つのに役立つということを学習していった。

① 温泉

日本は火山国のため地熱によって平均気温以上に熱せられて湧き出した温泉と鉱泉質またはガスを多量に含む温度の低い鉱泉がある。

含有物質によって硫黄泉・食塩泉・炭酸泉・鉄泉などがあり、入浴や飲料にすることで、治療効果があることは古い時代から知られていた。

自然の霊を信仰の対象にする時代では火煙を高く噴き上げる火山を見て神がやどっていると考えたのあたりまえのことで、御神火として崇めたのである。温泉も御神湯として崇め、その御加護によって病傷の災難を除く御利益を受けることで、健康が保てると信じたのである。

② 薬湯

草根木皮などをいれて冷水を沸かし薬湯として入浴した。湯の中に入れる草木の数によって、五木八草湯、三木一草湯などという。現在でも家庭の年中行事として五月五日の菖蒲湯（邪気を払う）や冬至の柚子湯などその名残である。また、夏の土用中に桃の葉を入れる桃湯（汗疹に効く）がある。

この薬湯は家庭で簡単にできる病気予防のため、現在でも、その時期になると町の八百屋で売られている。また、入浴が心身への良い効果をもたらす結果、有名温泉地の成分を粉末にしたり、薬効のある草花・木屑などの植物を入浴剤として盛んに売り出している。

③ 塩湯

当初、宗教上の禊をするために、手じかに川があれば川水を海があれば海水を使って身を清めた。海水を使っているうちに、健康によいことを発見する。

平安時代の公家たちの中には、わざわざ、須磨・明石の海岸に出かけたり、黒塩を取り寄せて沸かしたり、若狭・摂津周辺の海水をそのまま運ばせたりした。

この塩湯は明治時代にまで受けつがれ、芝浦の料亭や旅館などは塩湯を看板にしていたほどである。

塩湯は体を温める効果と肌をつややかにする効果があるということで最近日本の女性の間で大変もてはやされている。古でもこの美容効果を知っていたのではないかと思われる。

3) 保健衛生上

赤ちゃんが生まれてすぐに産湯をつかうのも、労働によってでた汗や付着した汚れを取るのも、保健衛生上、当たり前のことであったが、陰陽道信仰の盛んな平安時代には吉凶の占いによって入浴や髪洗いが制限されていた。しかし、これも、鎌倉時代になると、「入浴に吉凶やかましく言っていれば不潔となるので、この日はかまわず入浴した。」という意味のことを藤原定家は日記「明月記」に書いている。

現代でこそ毎日入らないと気持ち悪いと感じる人も多いが、平安時代の公家は一カ月の入浴回数は沐浴が四、五回、他は行水の小浴で、合わせて、二、三日おきくらいに入っていたようである。ところが、足利時代の公家は困窮して自邸に湯殿をもてなかったものが多く、月に二、三回なら良い方であった。

人々の入浴回数が多くなった時代は江戸時代中期頃からである。それは都市に人口が集中してきたことと、江戸の空風（冬期の風）といわれるほど常に風が強く、土埃か立ちやすい、といった地理的条件などが重なって、銭湯の数が飛躍的に増えたからである。

この入浴回数の増えたことに異議を唱える者もでてきた。それは、「養生訓」で有名な貝原益軒で「湯浴はしばしばすべからず。湿気過て肌開け、汗出て気へる。古人十日に一たび浴す、むべなるかな、……暑月の外、五日に一度沐ひ（かみあらひ）、十日に一度浴す。是、古法なり。夏月に非ずして、しばしば浴すべからず、快といえども気へる。」と言っている。

また、明治時代の学者、細川潤次郎が八十八歳のとき著した「養生日程」にはそう浴は五日に一回、若しくは七日に一回で足りる。労働者は毎日でも良いが、普通の人は頻繁にはいる必要がない。特に、老人は精力を消耗するから、回数を減らし、熱い湯をさけ、長湯をしない。夏は汗を洗い流すだけだから毎日入ったほうが良い。というようなことを述べている。

やはり、日本の暑い夏の入浴にたいしては誰もが例外を認めている。

4) 精神衛生および娯楽

古代寺院ではじめての入浴という行為は宗教的な「善行」の意味合いを強くもっていた。その、背景には身を清めることにより心も清浄にする、という思想があった。

実際、入浴してみれば心身ともに、すっきり、さっぱり、気持ち良いといった感覚をあげられるため、高温多湿の気候条件とあいまって、宗教的行為が次第に本来の意味を失い、娯楽、くつろぎ、といった要素を強くして行った。だからこそ、階級を問わず、温泉場での湯治や社交場としての銭湯を盛んにさせたのである。

① 温泉

713年に編纂された「出雲風土記」の玉作（玉造）温泉の条では、老若男女が温泉から出ては食べ、食べては入って一日中楽しんで過ごしている光景をおもしろく表現している。

また、当時の公家の日記などには、一族知人を入浴に招待し、その後、酒宴を催したり、湯殿で酒を酌み交わしたりしている様子がたびたび書かれている。

② 風呂講

村落にある薬師堂や観音堂で一定の日に湯を沸かし、信者が集まって入浴後、礼拝読経をする。その後、それぞれ持参した酒、弁当類を飲食しながら談笑して一夜を明かす、といったものもあり、これなどは信仰と娯楽が結び付いたものであり、家に浴槽の設備のない農家にとって、保健衛生上、役立ったのである。

③ 風呂ふるまい・もらい風呂

農繁期になると、村落ではそれぞれの家で風呂を沸かす体力と時間がないため、回り持ちで湯を沸かしてふるまい、その後、囲炉裏の回りに集まって談笑したりすることがあった。

これは、太平洋戦争の後半から戦後にかけて、物資の乏しい頃、近所の親しい知人や親戚などの間で行われていたことを思い出す。

④ 銭湯

銭湯が隆盛を極めたのは江戸時代の文化年間（1804～18年）で江戸市中に六百軒もあり、朝の六時から夜の十時まで営業していた。

銭湯に二階ができたのは1748年～50年頃で、

始めは武士の帯刀を預かるといった名目であった。そのうち、銭湯の二階ではお茶が出されるようになり、すしや菓子も売られ、また碁や生け花のけいこ場にもなっていて、まさに、庶民の社交場、娯楽場であった。

中では、湯女と呼ばれる女性をおき、客の背中を流すのはもちろんのこと、湯上がり後の接待などもしていたが、だんだんに風紀が乱れるような事もあり、風呂屋の二階の営業は明治十八年（1885）に禁止された。

⑤ 移動式銭湯

◆辻風呂 風呂桶を人通りの多い町角に置いて、お湯を沸かし通行人に入浴させた風呂

◆荷ひ風呂 人の集まる場所に風呂桶を担いで運び、樹木の下などに置いて入浴させた風呂

◆船風呂 川に浮かんでいる小舟に据風呂を積んで、お湯を焚いて入浴させた風呂。関西では「徳風呂」といった。舟風呂には税金が課せられていた。その点からみてもいかに利用者が多かったかが分かる。

◆花見風呂 花見の席に据風呂を持ち込んで花を見ながら入る風呂。季節のものとしては雪見風呂もあった。

以上の様々なアイデア商法の移動式風呂が商売として成り立つのであるから、いかに日本人が入浴好きで遊び心に長けていたかが分かるというものである。辻風呂は1680年（延宝八年）には出てきて、1841年頃には簡易移動銭湯が色々な趣向をこらして存在していたのである。

これらは風呂桶に湯をはった現代の入浴方式のもので、当時の銭湯が蒸気をつかった蒸し風呂でそれと区別するために最初は「水風呂」後に風呂桶に焚き口を設けて「据え風呂」と言うようになった。

(2) 入浴方式

1) 取り湯式

これは主に、天皇家が 宮中における様々な神事や儀式の前に行っていた入浴方式で、神道

ばかりでなく、仏教でも初期の頃にはこの取り湯式であった。時代と共に、水や湯を体にかけるだけでなく、現在のように浴槽にはいるようになった。

この入浴方法は公家階級・将軍・大名の入浴方式でもあった。将軍や大名は天皇の入浴方式をまねることでそのステイタスを誇示し、また、それを一般庶民があこがれからまねをして現代の形に変化していったと考えられる。

《入浴方法》

天皇の入浴する浴槽は「御湯殿」と呼ばれる部屋にある。天皇は毎日欠かさず湯帷子を着て浴槽にはいる。そして、数名の供の者がいて入浴の介添えをした。お湯は「釜殿」から「御湯殿」に桶で運び込むか、樋を設け外から浴槽に湯を流し入れる取り湯式の入浴方法である。

一般家庭でも、上流階級がつかっていた言葉をあこがれから使い始め、1960年代頃まで浴室を湯殿と呼んでいたが、現代的設備が整って、家の中に浴室が完全に入ってきたことで、現在は死語になりつつある。

《儀式的沐浴の種類》

儀式の入浴を「御湯殿の儀」とか「御湯殿始の儀」といい、下記のようなものもあった。

- 新生児が誕生した直後の吉日の儀式として入浴する、誕生浴（産湯）
- 皇室の即位、皇太子、婚儀、などで身分地位が変わった直後の吉日
- 新殿に移転後の吉日
- 新年を迎えての吉日
- 病気全快後の吉日

2) 蒸気浴・蒸風呂方式

歴史的には穴ぐらを意味する「ムロ」が転じて「風呂」になったと言われるように、岩の横穴を利用してその中で火を燃やして、水をかけて蒸気を発生させる蒸し風呂が入浴の原点であった。また、禅寺では竈に大きな鉄釜を据え、蒸気をたて、すのこ張りの小室に送り込む。蒸気浴の後、別の洗い場に置かれた湯釜と水槽の中の湯や水を汲んでかかり湯とした。

現在の湯船にとっぶり体を沈めて入る方法で

なく、蒸風呂であった。現在日常的に、お風呂に入るといっているが、風呂というのは本来、蒸風呂のことであった。

① 石風呂

瀬戸内海沿岸や四国に多く、天然の岩窟を利用したものが多かった。現存している愛媛県今治市桜井の石風呂は弘法大師発案指示で作られたと伝えられている。

石風呂はシダの枯木などをいれて焚き、石が熱くなったところで塩水を打つか、湿らせた海藻類を置き、その上から海水を湿らした筵を敷く。熱した床が蒸気をあげ、そこに入るのである。薬用蒸気風呂といったところである。

② 釜風呂

京都の八瀬の釜風呂は有名である。伝説では672年の壬申の乱にまでさかのぼり、それが現在復元されている。形は土饅頭形で内部は三畳ほどの大きさで床は平らな石を敷き詰めている。土壁の暑さは4～50センチ。正面に焚き口があり、青い松葉などの常緑樹の葉をいれて焚く。燃え尽きたころ灰をかき出し、石敷きの床に塩水を打った筵を敷いて、その中に横たわって汗を流す。

生木から発散される蒸気に薬用成分があり、石風呂と同じ効果がある。

この二つが現在でも残って使われているのは薬効があるからである。

③ ふごぶろ・むぎぶろ・おろけ

日本の農村では農作業の後に風呂を焚くのはさらに重労働が重なるので井戸端で体を拭いたり行水を浴びたりするのが一般的であった。しかし、各地で水を節約できる蒸し風呂形式の風呂が考案されてつかわれていた。例えば、土間に竈を築いて鉄の釜を据え、底に簀の子をしいた桶を置き、滑車で上下できる藁で編んだ蓋をのせて、桶の中に入って蒸されて垢をかき出す方法である。これは三重県の鈴鹿山麓や伊賀地方に残っていて「ふごぶろ」と呼ばれている。その他に、丈の高い樽状の桶に側面から出入りできる戸をつけ、下の竈で火を焚く。これは、滋賀県の湖北地方から北陸にかけて見られ、

「むぎぶろ」といわれている。また、佐渡には「おろけ」という蒸し風呂がある。これは、別に沸かした湯を二十センチほど桶に入れ、湯枕と呼ばれる高さが約二五～三十センチの台に腰かけ、藁製の大傘の蓋をする。桶の中は真っ暗で温度も快適なため、蒸されながらつい眠ってしまう。先に入っている人に気づかず、次の人が熱湯を注ぎ込んでしまうといった事故も多かったようである。

3) 取り湯式と蒸気風呂の併用

① 寺院

寺院の入浴方式は当初、蒸し風呂的要素が強かったが、時代を経るに従って、取り湯と蒸気風呂の折衷方式になった。

現在、われわれの入浴方式は密閉した浴室の湯船にたっぷりとお湯を入れ、湯気をたて、体を浴槽に沈め、洗うときは浴槽から出て蒸し風呂式にごごし体をこする。つまり、現在まで比重のかかり方の多少の違いはあるが、取り湯式と蒸気風呂式が一体となっているために、お湯といたり、お風呂といたりして、ふたつの言い方が残って使われ続けたのも当然である。

《大湯屋》当初、寺院では仏教の布教や社会事業の手段として、参詣にきた一般大衆のために潔斎浴場を僧侶とは別の建物で行った。それを大湯屋と言った。

今日でも残っている代表的なものは東大寺（足利時代に建て直されたといわれている大湯屋）にある。特に、僧尼のための温堂・温室・浴室院といった建物をもうけていたのは、七堂伽藍が整備された大寺院だけであった。

東大寺の浴場は正面から入ると広い板の間になっている。次室は破風造り（破風とは日本建築で屋根の切妻についている合掌型の装飾板のことで、破風造りというのと、装飾板のついた屋根のことである。）の入口を持った室で、ここには大きな鉄釜が据えられている。この場所は取り湯方式で、さらに、続いた室は蒸風呂になっている。裏の広い部分には火を焚く場所があった。この東大寺の浴場形式は何回も火災にあっ

ているので、建築時の形そのまま踏襲しているかどうか分からない。

寺院でも最初は取り湯方式であったが東大寺の浴場で見られるように、湯気を利用した蒸気風呂を併用するようになり、それが、銭湯での入浴方式に受け継がれていった。

最初は施浴として出発した入浴が入浴利用者の増加と施浴回数の増加にともない、寺院側の経済的負担が増大したため料金をとるようになっていった。つまり、後の銭湯の前身であると考えられる。

② 銭湯

料金を払って入浴する銭湯は鎌倉時代にはすでに誕生していた。

営業が主目的の銭湯ができたのは1590年の大阪で、翌年、江戸でも開かれた。当時は蒸し風呂方式が、中心で、水汲みの労力と燃料の費用をいかにかけないかといった様々な工夫が施されていた。図-1

江戸時代に銭湯が隆盛を極めたのは、「豪商の内たりとも、風呂を焚かぬは第一火の用心の為、二つには勘定なり、風呂場、焚場、湯殿と、江戸間一坪半も塞がれば、此店賃一間に一步にては上がれず、桶釜の損じ、薪炭高直なれば、皆々銭湯へ行くと知るべし。」などと、豪商の家でさえ、内風呂がなかったことが、嘉永三年に西澤一鳳著「西澤李叟」の江戸風俗の批評随筆文の中に記されているほどである。ことに火事の火元になることを非常に恐れたのが最大の原因である。

◆戸棚風呂 広い板の間の端の三方を板で囲い、板の間に続いた部分に引戸をたて、その内部にはお湯が30センチほどはいった浅い浴槽がある。引違戸によって湯気を逃さずに蒸気風呂状態にし、垢を浮き立たせて、洗い場の板の間で垢を落としたのである。この風呂は男女混浴であった。

戸棚風呂の引き違い戸の上や鴨居の上には東

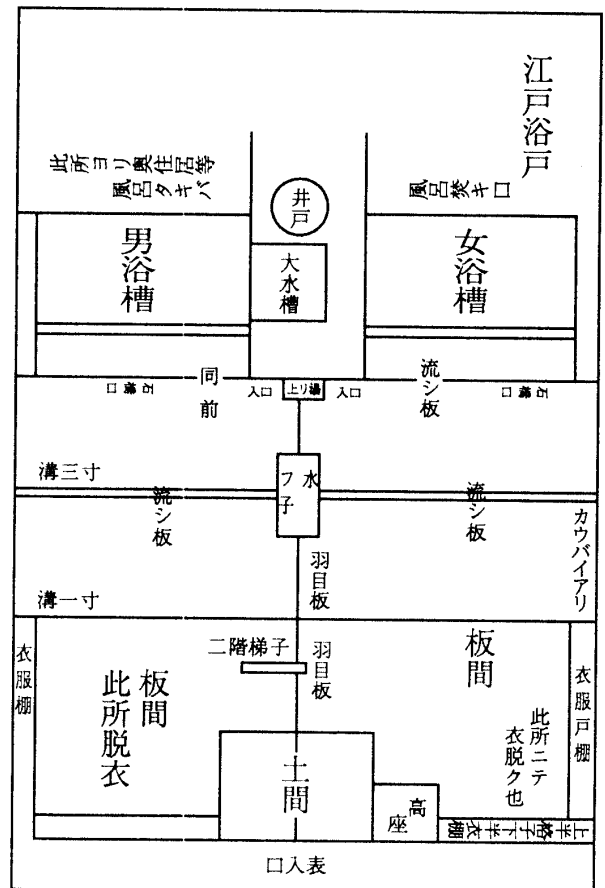
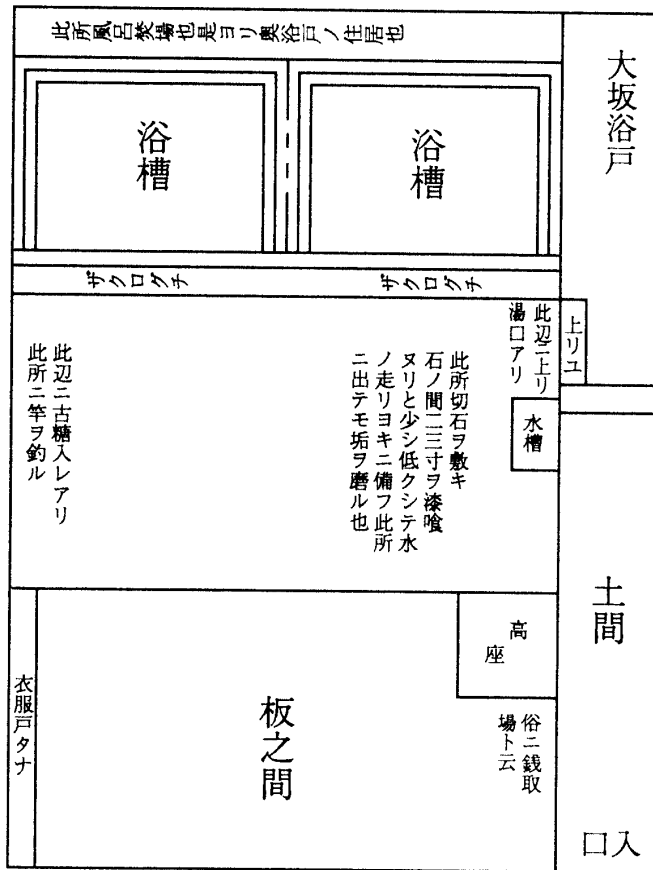


図-1 大阪の銭浴の平面図

江戸の銭浴平面図

大寺に残っているような破風造りが同じように乗せられていた。

銭湯が寺院の屋根をまねることで金銭は取るが、格式のあるありがたいもの、といった、位置づけを強要したと考える。それが、いつのまにか金銭を取るのが当然となり、立派な豪華な屋根の形だけが風呂屋にふさわしい形として残ったのである。ところが、逆になんで大時代的なのか分からなくなって、現在でも、銭湯の出入り口の古めかしい形の破風造りの屋根を見るとお風呂屋さんがあるなと気がつくだけのシンボルマークと化しただけになった。

◆石榴風呂 戸棚風呂では引戸を開けるたびにせっかくたまった湯気が逃げてしまったり、暖まった温度を下げってしまうので、引き違い戸に替え、代わりに浅い浴槽への出入り口上の鴨居を低くし、体を低くかがめて出入りするようにして中の蒸気をのがさないように工夫したのが石榴風呂である。

石榴口の語源は腰をかがめて入ることから鏡にかけ、また、鏡（銅鏡）を鑄るのに石榴の実の酢を用いたことから、かがみいる＝石榴口と洒落ていったようである。

石榴口は戸棚風呂の入口と違って鳥居の形をしていて、両端の柱には種々の紋を彫ったり、金箔を押してある。戸や鴨居には朱や黒の漆で仕上げられ、風景画や花鳥画を描いて手の込んだ華やかな装飾で銭湯の内部を美しく飾るようになった。これは、現在の銭湯の浴槽の壁に描かれた富士山の風景画の原点である。ちなみに、銭湯の洗い場に描かれている背景画は大正元年“1912年”に東京・神田猿樂町にあった「キカイ湯」がこどもが喜んで入るようにと、大きなペンキ絵を描いたのが始まりである。

戸棚風呂も石榴風呂も中は暗く、蒸気がこもっているの、何が起こってもわからなかったり、湯が汚れていても気がつかず、風紀上好ましくないこともあった。時には殺人まであったようである。

しかし、始め低かった出入り口もやがて高めになり、湯船の回りの囲いも取り払われ、浴槽と洗い場が広々と一体になった現在の銭湯に変わっていった。現在の銭湯のような広い洗い場になったのは明治十年頃からで、浴槽を低くおとしこみ、お湯をたっぷりはり、天井を高く、湯気抜きの窓をつけて明るく開放的な空間に変

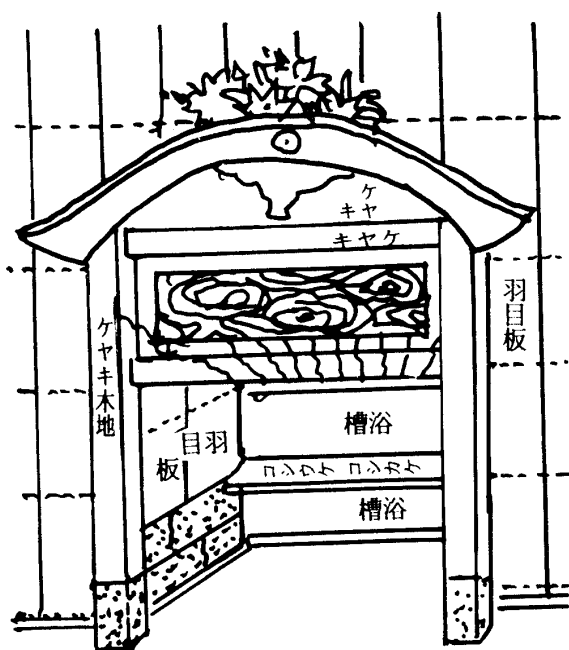
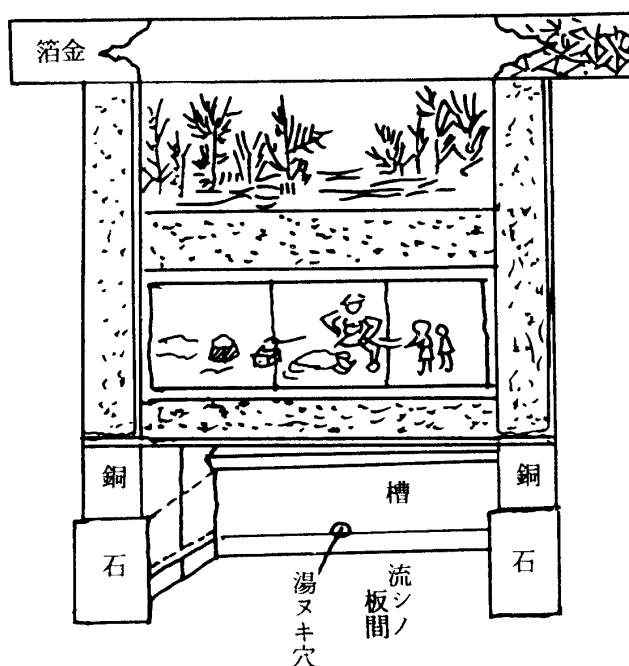


図-2 柘榴口（ザクログチ）破風造り型



柘榴口（ザクログチ）鳥居型

化した。それを「改良風呂」といい、現在の銭湯の原型となった。

石榴口が禁止になったのは明治十七年であった。

◆洗い場 浮いた垢を落とす場所である。ここは板敷きで中央に溝があり、使ったお湯がそこから流れるようになっていた。垢を流すきれいなお湯をためてある「陸湯（おかゆ）」はそこから自由にお湯を汲むのではなく、湯汲み男に柄杓で、桶に汲んでもらっていた。冷水をためている「水舟」からは自由に汲み出せた。

洗い場と脱衣所は上がり框で段差をつけ、その上がり框と脱衣所の間には半間ほどの幅で竹製の簀の子が敷かれ、水が脱衣所の方へ行かないような工夫がされている。浴槽のある石榴口を境にして、すべてオープンであった。

木製の浴槽と洗い場は掃除が行き届かないと、やがてぬるぬるして不潔になる。大正時代になって掃除がしやすく維持管理が容易であることから一番最初に洗い場の床がタイルに変わった。昭和に入ってやっと洗い場に水道の蛇口が取り付けられた。それまでは、体を洗うためのお湯は、浴槽から汲み出していた。

江戸の銭湯は男女混浴とその禁止令とのいたちごっこであった。温泉での混浴は普通の習慣であったため、銭湯の混浴も当然のこととして受け入れられていた。しかし、風紀の乱れを恐れる幕府はたびたび禁止令をだしたが、守られるのはその当初だけで、すぐにもとの混浴に戻ってしまった。銭湯での混浴が完全になくなったのは明治時代になってからであった。

4) 取り湯方式

① 据え風呂

居風呂、水風呂ともいい、竈を据え付けた大桶に湯を沸かして、入浴に供するもので、現在の入浴方式である。

この入浴の習慣は豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592～98年）に従軍した将兵が持ち帰った簡易入浴方法であった。

文化年代（1810年代）に湧水量の多い掘り抜き井戸ができ、水が得やすくなったことで、内

風呂として家庭内に浴室を設置するようになった。また、桶の中に加熱装置を入れて湯を沸かす方法が考案されたり、年頃の娘がいる家では混浴の銭湯の風紀上の問題から家庭内に据え風呂を置くようになった。

◆鉄砲風呂 木製の桶に竹のたがをはめた浴槽内の隅に、鉄砲のような形をした銅製の焚き釜を縦に通し、上から炭を入れ、下から空気をいれて燃す、湯がわいたら上の口に瓦をのせ、火の勢いを調節する。

◆五右衛門風呂 釜ゆでの刑に処せられた大盗、石川五右衛門から名づけた。直接火を焚くので沸きが早く経済的なので、草津、大津、周辺から京阪神にかけて圧倒的にこの風呂が多かった。

入浴方法は浮いている板の上に足をのせバランスよく平らに底に沈めてから、体を沈める。知らないで浮いている板を出してお湯に入ると、有名な「東海道中膝栗毛」のなかで、弥次さん喜多さんの二の舞いで、足の裏を火傷してしまう。この風呂は筆者の親戚で1960年代まで使われていた。

◆農村の据え風呂

昭和になってから農家でも山の沢から竹の樋を使って水を汲み入れる。などの工夫をして、水汲みの労働を楽にして家の外に風呂場をもつようになってきた。筆者も子どものころ農家のお風呂に入った経験があるが、電気もなく、ただ焚き口の薪の燃える火の明るさが頼りであった。だから、お湯が汚れていてもあまり気にならずにはいていた。洗い場の簀の子の下に廃水をためる大きな桶が半分埋め込まれていて、廃水を肥料としてつかったのである。とにかく、一滴たりとも無駄にせず使えるものは使う工夫を徹底的にしていた。化学肥料にたよることなく、人間が出す自然の排泄物の徹底利用という合理的精神が行き渡っていたのである。

(3) 入浴作法

禅宗では「威儀即仏法」「常住座臥」といって、日常の立居ふるまいすべてが修行である。

当然、浴室でのふるまいも、行の実践の場であり修行の場であった。

1) 禅宗の入浴作法

- ①入浴に際しては浴具を右手で携える。
- ②浴室にはいって、本尊に焼香礼拝。
- ③浴主（浴室を司る僧）および周囲の人に会釈をする。
- ④袈裟法衣を脱いで竿にかける。
- ⑤脚巾という布で腰や脚を包む。
- ⑥浴裾と呼ばれる単衣の浴衣を着る。
- ⑦衣服は決められた順に脱がなくてはならない。
- ⑧浴室内では静粛を旨とし、笑い声や大声は厳禁。
- ⑨多量の湯水を使わない。
- ⑩湯を立ててかけてはいけない。
- ⑪身体を洗う時は顔から洗い、上から徐々に下へと進む。
- ⑫避処（陰部）を洗ってはいけない。
- ⑬湯水を傍らの人に注いではいけない。
- ⑭桶をたたいたり、その上に脚を架けたりしてはいけない。
- ⑮身体にできものや灸のあるときは浴順を後にすること。

2) 入浴順序

禅寺では職階が厳格に決められていた、しかし、入浴の順序は修行途中の若い衆僧が最初に入り、次に頭首で、住持は最後になっていた。しかし、この下から上への順序が時代と供に変化して、身分の高い者から順序厳しく入浴するようになった。時には、順序を崩すと争いの原因にもなった。

室町時代には武家の屋敷内に内風呂が普及しはじめ、身分の高い家では主人専用の湯殿があった。主人、隠居、子供、主婦、嫁、の順であった。この順序は現代でも実行している家庭があるが、ほとんど、入浴順序はなくなったと考えてもよいであろう。

現在、一番風呂は年配者の健康に良くないといわれるのでますます入浴順序が乱れてきたようである。

3) 入浴に必要な湯具

入浴にさいしては寺院の入浴作法にしたがって必要な物があり、それらを使って入らなければならなかった。しかし、時代とともに、厳しい作法も簡略化され、きがるに裸体で入浴するように変化していった。

①浴衣

裸体では入浴できず、內衣・湯かたびら・後に浴衣というようになった衣類を、かならず着用して入った。この入浴着は白布で作られたもので、入浴以外に他人の前で着ることはなかった。

②湯禪・湯巻

入浴時のたびに窮屈な浴衣を着るのがめんどろになり、平安末期からだんだん男子は湯禪、女子は湯巻・腰巻に変わっていった。この着衣は1700年代の始め頃からすたれていく。

③手拭

湯禪の代用として使われるようになった。女性には手拭を三枚用意し、顔用、胸用、下用と区別した。

④風呂敷

入浴に必要な浴衣や手拭などを包んでもって行き、入浴時には脱いだ着物を包み、帰りには濡れた入浴用品を包んだのである。

⑤湯帽子

女性が入浴する際に頭髪が乱れたり濡らさないように、白布で頭髪を包んで結び、結んだ両端を長く前に垂らした。

⑥糠袋

木綿で作った袋に米糠を入れて、体をこすり垢を落とした。糠は江戸時代の石鹼であった。この糠袋は赤い茜木綿製が多かったので紅葉袋とも呼ばれている。

以上、日本の入浴の歴史を見てきたが、蒸し風呂を意味する風呂という言葉が残って現在も使われていることに注目したい。それは、蒸気浴が完全になくなったのではなく、お湯を沸かして浴室内に蒸気をこもらせて温める形で残ってきたからである。

〔2〕入浴の歴史《西洋編》

人類は地球上のどこかに定住するときにはかならず水辺近くに居を構えたわけで、人間が生きていくために欠かせない飲料水と料理用の水の確保がまず最初であった。

そして、その水辺で暑い季節にたまたま水の中に落ちて、そのとき肌がさっぱりしたといった感覚を知って水浴びをするようになったのだろう。これは、アジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパのどこの地域でもさほどの違いはなかったであろう。

この入浴習慣を“西洋では”とひとくくりにするのはたいへん困難であるが、代表的な入浴方法を一応たどってみることにする。

(1) ギリシア

健康を保持するために行う体操の添えものとして入浴が行われた。冷たい水をさっとあびて気分爽快になればよかった。からだがきれいになったとしても成り行きのことであった。

ラテン語「サニタス(sanitas)」とは「健康」のことである。英語では、浴室・洗面所・トイレの水回りの場所を総称して、サニタリー(sanitary)という。清潔なとか衛生的な場所といった意味である。欧米では生理的、衛生的な場所としての意味が強くその面からの健康が保たれば良いといった合理的な考え方であって、日本のようにメンタルな面の効用に関しては一切眼中にないようである。

しかし、現在、日本でもこのサニタリーといういいかたが盛んに使われだしたことを考えると、日本でも、清潔、衛生上の役割の強い場所としての認識が高まってきたよにも思われる。

(2) ローマ

ローマの大浴場はたいへん有名で入浴は社交上必要かくべからざるものであった。そしてくつろぎや疲労回復を主たる目的でその結果、健康がたもたれるということであって、汚れを落とすのが目的ではなかった。紀元216年に完成したカラカラ浴場は一時に1600人も収容できた。内部には、浴場の他にダンスホール、図書館、博物館、遊歩道、競技場、娯楽室、など様々の

設備があった。風呂そのものの種類も多く、熱湯室、温水室、冷水プール、蒸し風呂などがべつべつにもうけられていた。最初は男女別々であったが、後に混浴場が設置された。また身分の別なく入場できた。

なお、4Cのローマには公共浴場、856の施設風呂があった。

① ローマ風呂の入浴手順と方法

入浴する者は行儀正しく、慎み深く、自分では何もしないで、他人に水をかけてもらったり、摩擦してもらうのがマナーであった。

午後1時、風呂がわいた合図の鐘の音。お金を払って入場。テニスをして十分汗をかく。

着衣のままほどよい温かさの浴室で少し汗をかき、次ぎの部屋で着物をぬいで体にオイルを塗ってもらう。つぎに温室に入りぞんぶんに汗を流す。蒸し風呂で短時間の発汗。温水、ぬるま湯、冷水、の順に頭にかけてもらう。垢をかきあつめる彎曲金具で体中をごしごしこすり、スポンジでふき取り、もう一度オイルを塗ってもらい、浴槽につかって終了。

後はぶらついたり、座ったりして友人たちと過ごす。

入浴時間は夕暮れまでであったが、後には照明をつけて夜間も開場した。

風呂は食欲を増進するということで、食べては入り、出ては食べて、肥満はもちろんのこと、命を落とす者もいた。

当初、大浴場は男女区別して作られていたり、小浴場は時間帯をきめて男女分けて入浴していた。しかし、後に男女混浴場が、作られるようになり、風俗が、乱れていった。

とにかく、ローマの浴場は大社交場、大娯楽場として繁栄していたのである。

② 浴場の形

ローマのカラカラ浴場の史跡をみても、その規模の巨大さに圧倒されてしまう。大理石を積み上げ大空間を築いた。内部も華やかに装飾されていたようで、現存している床のモザイクに往時をしのぶことができる。ドームの天井や壁などにも金銀宝石がちりばめられ、華美をつく

したものであった。銀や象牙で装飾していない浴室にご婦人たちは入りたがらなかったようである。

(3) イギリス

ローマ軍の遠征の結果ヨーロッパ中に公共浴場が広まった。しかし、イギリスではローマ軍の撤退後、この入浴文化も消えてしまい、入浴習慣は人々に親しみ深いものではなくなった。後に、十字軍が持ち帰ってきた「ターキッシュバス」で共同浴場施設がよみがえったのであるが、その間一千年近くも間があったのである。

中世の作法書には、毎朝欠かさず手や顔、歯を洗えとあるが、入浴についてはふれていない。しかし、客人には入浴をすすめるように書いてある。9C～11Cにかけて英国に侵入した北歐人（デーン人）にたいして、英国人は「自分たちの国の習慣にしたがって、毎日髪をすき、土曜日ごとには風呂に入り、たびたび着物を着替えるなど、つまらぬ手管をいろいろ使って、身の美しさをひきたてようとしている」とちゃかした文章が残っている。

在位1199～1216年のジョン王はほぼ三週間ごとに入浴していた。

当時の浴槽は修道院と同じ円形か楕円形の木製で数名で入浴する。家族全員と客人と一緒に入浴し、浴槽に台を渡して、食事をしたのである。この時代には日本の混浴が英国でも行われていた訳で、そうなったのも、湯のいれかえがたいへんな作業で、また、お湯がさめないうちに、家族全員と客が供に入浴しなければならなかった。

その時代を描いたさし絵には戸外で入浴中の貴婦人にかしづく騎士が描かれていたりする。この時代は入浴ばかりでなく、大きなベッドに家族と客人と一緒に寝ていたのである。

騎士の活躍した中世時代、若者が新たに騎士になる日の朝、入浴して身を清め、騎士の叙任式にのぞんだのである。また、戦いに出陣するときにも、入浴して身を清めた。このように、一生の大事の時や、祝い事の時などには入浴することになっていた。これは、キリスト教の洗

礼の模倣ではないかといわれている。

14C末にヘンリー四世が「少なくとも一生に一度は入浴しなければならない」という「入浴令」をだしているほどである。

これは、英国の地質・地形も関係しているようで、水汲みが相当な重労働であったことによる。

民衆は公共用井戸で上半身を洗う程度であった。

十字軍の遠征（1069年～13世紀後半にいたるまで七回にわたっておこなわれた）によって「ターキッシュ・バス」の良さが伝えられて、公共浴場が再び息を吹き返したのはリチャード二世（在位1377～99年）の時代で、ロンドンの浴場は18軒以上にもなった。この公共浴場を「シチュー」といった。しかし、この公共シチューもヘンリー八世（在位1509～47年）の時代、法令によって閉鎖されてしまった。その原因は人口増加に伴い町がひろがることで森の木が切り倒され、湯を湧かす薪がだんだん入手しにくくなってきたこと。ニューカースルから船で運ばれてくる石炭も、その時代はまだ高かったこと。風紀が乱れ、教会からもものいいをつけられたこと。伝染病がはやるとお客がこわがって寄り付かなくなること、などが原因で一世紀もたたないうちにふたたび途絶えてしまった。そして、17世紀になって、まったく新たな舶来の贅沢として、再び英国に導入され、完全に一般的なものとして復活するのは18世紀の後半になってからである。浴場が閉鎖されていた長い期間、体を清潔にしておこうなどと気遣う者はほとんどおらず、入浴は病気の治療のためだけであった。

17世紀の後半にローマ人によって11世紀に再発見されていた「バースの鉱泉」が再々度見直され、病気治療の効能が喧伝されたこともあって入浴者が増加した。

この鉱泉は露天風呂で男女混浴。回りに見物人が大勢いる衆人環視の中、ごわごわの黄色い帆布でつくられた特別製のガウンをはおり、鉱泉に出入りした。女性はお菓子や装身具、香水

などをもって入り、木の実の殻や果物の種を鉱泉の中に落としてお湯を汚したので苦情の種となった。

1782年に出版された作法書には「毎朝、白いリネンで顔を拭くようにすすめ、顔を水につけて洗ってはいけないと記されている。

1801年に、ある医者が「ロンドンに住むほとんどの男性と多くの女性は手や顔は毎日洗うが身体のほうは何年間も洗おうとしない」といっている。

とにかく、バスルームは十七、八世紀になってもまだあまり普及せず、持ち運び可能な楕円形の浴槽を居間などに持ち込み、スクリーンで囲んだり、天蓋があってその周囲をカーテンで囲んだりして目隠しにし、行水的な入り方をしていた。メイドが台所で沸かしたお湯をバケツで運んだ。

1837年にヴィクトリア女王が即位したとき、バッキンガム宮殿に、浴室は一つもなかったのである。

1860年代になってやっと熱い湯や水の出るバスルームが普及してきた。大きな邸宅には数室のバスルーム、集合住宅では一つではあるが、ゆっくりと体をのばせる大きな浴槽と湯釜が設置された。そのうえ、シャワーと化粧室もつけられた。

エドワード七世（在位1901～10年）の時代のバスルームには大きなガス湯沸かし器がつけられ、もうほとんど現代に近い状態になった。

(4) フランス

フランスでも英国と似たり寄ったりの状況であった。王宮では壮麗な浴室が次から次へと作られたが、使うより作り替えを楽しんでいたようである。

ルイ十三世（在位1610～43年）はほとんどありきたりの木製浴槽で満足していたが、晩年になって豪華な大理石の浴槽に替えたが、お湯のなかでもお尻が冷たい。そこで水中クッションとレースの縁飾のついたおおい布などの、風呂用具が必要になった。そのため、それらの用具が宮廷人たちの間の贈答品としてもてはやされ

た。

ルイ十四世（在位1643～1715年）は1677年に太陽王としてふさわしい大理石の浴槽を二つ新設する。1678年にブロンズの装飾つき浴槽を二つ追加。1679年には合計六つになったがおさまらず、幅約3メートル、深さ約1メートルの大きなローズピンクの大理石の浴槽をおき、天井に金箔をはった豪華版の浴室をつくった。風呂に入るときはクッションやおおい布、レースが用意され、さらに大きな布のテントがはられた。準備が大変であったが、めったに風呂に入らなかったのも、おつきの人たちはたすかったのである。結局、寝室の小さい風呂のほうが落ち着くといわれて使われなくなった。

ルイ十五世（在位1715～74年）はルイ十四世の大浴槽をポンパドゥール夫人にプレゼントする。ところが、運び出すのに大変な費用と労力がかかり、革命の種を蒔いたのではないかと思われた。この浴槽は庭の噴水に変身し、現在はオランジュリー美術館に飾られている。

宮廷人の中には川での水浴びを好み「ネズミ色のリンネル製大型シュミーズ」をくるぶしまでしっかりまとい、男女一緒のグループでセーヌ河へ川遊びとしゃれこんだりした。

マリー・アントワネット（十六世紀の妃）は毎日入浴していた。キッチンのダブルシンクのように洗うための浴槽とすすぎ用の二つの浴槽を使っていた。

パリでは1838年に「宅配風呂」といって、水売りがたっぷりお湯の入った浴槽を馬車で積んで、お得意さんの住んでいるアパートマンまで配達していた。この利用者は主に中産階級で宅配浴槽は1013個を数え、おおいに、利用されていた。

フランスの入浴は英国よりはまだ少しよいと言った程度でそれほどの開きはなかった。両国民とも最終的には入浴がそれほど魅力あるものではなかったことがうかがえる。

〔3〕現在の入浴

(1) トルコ

ローマ時代に栄えた公衆用の蒸気浴場はイスラム文化に受け継がれた。十六世紀に中近東の大半がトルコ帝国に支配されたため、いつしか、ハマーム（トルコ語で公衆浴場のこと）をターキッシュバスと呼ぶようになった。

イスラム教ではタハーラ（清浄）は信仰の半分を占める。大浄・小浄があり、合わせて日に七度、体を洗う。大浄とは全身の洗浄、小浄は頭部、両ひじから下、両膝から下であり、小浄の場合、水がないときは砂で代用できるのである。

入浴方法は現代のハマームとそれほど変わらないようである。

筆者はイスタンブールへ旅行したとき、日本女性のガイドにハマームに案内してもらった。日本の銭湯のように同じ場所で左右に別れて入って行くのではなく、男性用女性用と入口が別々の場所にある。まず、ドアの上半分はガラスになった一人分のロッカーに案内され、衣服を脱ぎ、そこに置いてある、大きなタオルで身体をおおい、ロッカー室を出て、別のドアから内部が半球状の大きなドームの中の壁際の水道のカランと並んで作り付けになったベンチに案内された。室内は床から温められ、熱せられた蒸気によって発汗作用が促され、だんだんに汗びっしょりになる。頃合いを見て、ドームの中央に12角形の大きなタイルを張られた台があり、そこに寝かされ、太った大きな女性に体じゅうごしごしこすられる。あまりの力強いこすりかたに悲鳴があがるほどである。あつというまに垢がぼろぼろでてくる。全身が終了すると、お湯をかけられる。頭を洗うときは水道の蛇口まで連れていかれぬるま湯を頭からかけられ石鹸をつけて洗って、入浴終了となる。その間大きなタオルはあかこすりのときだけ身体の下に敷かれこすらない部分にかけて置くというようになるべく裸を見せない配慮をしていた。ドームをでてからロッカー室のあるサロンで紅茶を飲んで水分を補給して身体の火照りをさましながらくつろ

ぐ仕掛けになっていた。

この方式は中近東のアラブ諸国一帯に広がっている入浴で、アラブ風呂とも呼ばれている。

イスラム教では同性でも全裸を見せてはいけないという戒律があるため、全裸での入浴は禁じられ、男性でも腰に布を巻いているのである。

現在のイランではホメイニー師が、するべき沐浴として①不浄の（時の）沐浴、②月経の（時の）沐浴、③分娩の（後の）沐浴、④おりものの（ある時の）沐浴、⑤死・死体と接触のあった時の沐浴、⑥死体の沐浴、⑦願かけや誓願によって義務づけられることとなる沐浴、と七つあげて、さらに細かく定義づけをしているほどである。

(2) フィンランド

風呂嫌いのヨーロッパにあって、この国民は大変な風呂好きで異色の存在である。特に、サウナ風呂は有名である。

都会のアパートには共同のサウナが、郊外の一戸建の家にはそれぞれサウナ室をもっている。彼らは葉のついた白樺の小枝を持ってサウナに入る。そして、熱気浴をしながら、家族や友人同士、お互いの体を白樺の枝でたたき合う。熱くなった白樺の葉の刺戟で、血行が盛んになるという、独特のサウナ健康法である。サウナを出ると、火照った体を冷やすために、目の前の湖でひと泳ぎする。冬には泳ぐかわりに、裸で雪の中を転げ回る。好きな人はこれを何回も繰り返すのである。その後、ソーセージをつまみながら、ゆっくりとビールを飲む。これは極寒の北国のたいへん健康的な楽しい入浴方法である。

サウナは最近日本でも盛んになり、温泉旅館や銭湯にも設置されている。また、家庭にも一人用のコンパクトなサウナを設置するケースが増え始めている。

(3) ドイツ

ドイツの南にあるフランスとスイスに国境を接したシュヴァルツワルト（黒い森）の近くにあるバーデン・バーデンはヨーロッパでも有

数の温泉保養地である。バーデン (Baden) とは温泉のことで、日本語にすれば「温泉温泉」になる。

紀元50年頃にはローマ人が侵略し、皇帝浴場、兵士浴場、神殿などをもつ大規模な温泉町を建設した。200年余りのち、アレマン族の侵入によって破壊され、12世紀になってまた復活し、中世有数の温泉地となった。三十年戦争やペストの蔓延など混乱が相次ぐ十六、一七世紀をなんとかいきのび、十八世紀後半以降、再び隆盛を極め今日にいたっている。屋内外に七つの浴場をもつ、カラカラ浴場では入浴のために水着を着用する。医学的な目的をもったさまざまな浴場では水着をつけず、混浴の時間帯もある。ここでは温泉を飲用するため、温泉館 (トリンクハレ) という特別の建物がある。

隣にはクワハウスという大ホール、カジノ、レストランなどをもった大施設がある。

(4) ハンガリー

ハンガリー首都、ブダペスト市内には大都市にもかかわらず100箇所以上の沢山の温泉が湧き出している。早朝から営業している温泉が多く、出勤前に入浴していく市民も多い。その効能はリュウマチ、心臓病、ノイローゼなどに効くと言われている。

市内の温泉は16世紀のトルコ占領時代に開発され、トルコの名残をとどめた円形ドームの屋根のものが多い。入浴方法は水着と帽子が必要で温水プールで泳ぐというような入り方が主流になっている。トルコ風の蒸し風呂、医療マッサージの施設もあり、湯上がりの客が談笑したりスナックを食べたりして、社交の場にもなっている。

(5) アメリカ

アメリカでは英国の影響のもとで、出発した国であるから、入浴に関しても全く同じような考えかたであった。つまり、入浴にあまり関心がなかった。しかし、衛生上からだを清潔にするという観点とあくまでもプライベートなこととして、寝室の付属施設といった趣で衛生関係をまとめたサニタリーとして、浴槽、洗面、ト

イレをコンパクトに一つにまとめてしまった。

ハリウッドの映画の中でみる開拓時代の入浴はポータブルの浴槽を居間や寝室などに運び込み、衝立でかこって、脱いだ衣類をそこにかけ、泡だらけの浴槽に体を横たえ、柄の長いブラシで背中などを洗い、あわがついたままの体を大きなバスタオルで包んで、でてくるといった情景をよく見たのもである。筆者は米国のホテルのバスでまねてみたが、背丈がないため浴槽に横になった途端、バランスを崩して足を滑らせ、頭まで潜ってしまった。石鹸分が肌に残って気持ちが悪く、浴槽のお湯を抜いて後、改めてシャワーを浴びる始末であった。見ると体験するのは大違いといったことで、日本式入浴方法がいかに素晴らしいか再確認した。

アメリカでは1970年代にカリフォルニアの若者たちの間で木製の浴槽にお湯をはって、他の人と一緒に入ることがはやり、1978年までに8万個もの木製浴槽が使われている。これが単なる愚行に過ぎないのか、あるいはひとつの文化となり得るのか、今のところまだ決定的なことは言えない、これは「さあ横になって食べよう～忘れられた生活様式」のなかでバーナート・ルドルフスキーが書いている。更に、アメリカ西海岸では、この現象を「先祖返り」の前兆とみなしている。再発名されたこの「ホットバス」は、時代錯誤のしろものである。他人の家の風呂を使うことで、お互いの友愛を示すというのは、中世に立ち戻ることだからである。そして、ルドルフスキーは「ホットバス」の由来について、一つは、「我が国の兵士が、太平洋戦争の先勝記念に日本から本物の木製浴槽を持ち帰った頃にまでさかのぼるとする説。カリフォルニアのブドウ酒醸造工場で、そのたるを木製から銅製に転換したのと同じ頃に、木製浴槽ブームが起こったというありきたりの説。」の二つを上げている。

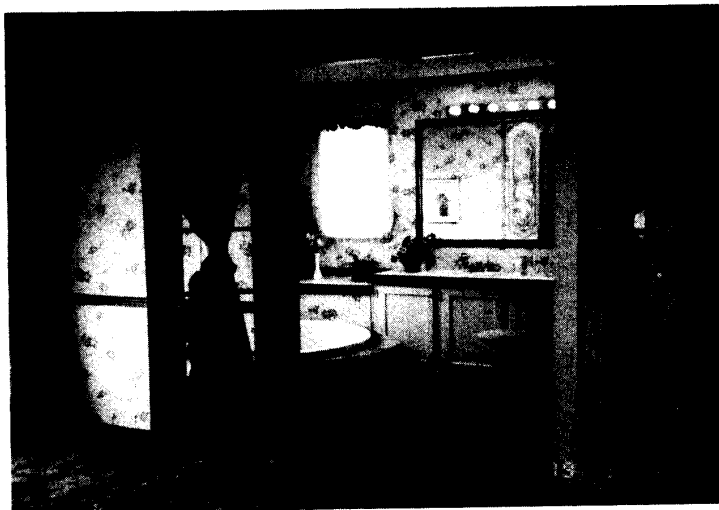
筆者が1986～1987年にかけて一年間住んだミシガン州アナーバーで見せてもらった住宅のなかに大きな「ホットバス」を備え付けている家が三軒もあった。日本の温泉のように大きく開

けた窓越しに外の庭の木や花を愛でながらの、入浴。回りにはすのこ板を敷き詰め、浴槽の縁に書見台やお酒のビンやグラスなどが置いてあった。

また、1991年にアナーバーへ行った時、安価な建て売り住宅のモービルホーム団地を見学した。いくつかのモデルルームの主寝室のバスルームにはカリフォルニアスタイルのバスだといってプラスチック製の大きめの円形や六角形の変形型浴槽を置いて、住宅を売るための目玉にしていた。浴槽は木製でこそなかったが確実に四人は入れる容量である。

モービルハウスという工場生産の住宅ゆえ、浴槽を埋め込むことができない。そのため、浴槽の回りに階段を二段ほど巡らして床からせりあがった舞台のような感じで浴室に置かれ、浴槽の縁まで寝室から続いた同じ色の絨毯が敷き詰めてあった。使い方は従来どおり、浴槽の中で体を洗うのであろうか、夫婦で一緒に入浴できることと、今までの、生理的な欲求を満たせばよいといった一体型のコンパクトなサニタリーから脱却してリラックスできるような浴室に変えようといった意気込みが多少なりとも感じられたのである。

これはルドルフスキーがアメリカ中に広がるのだらうかといった懸念を吹き飛ばすような光景であった。そのことを裏書きするようなテレビコマーシャルがあった。それは、ニューヨー



モービルハウスのカリフォルニアスタイルの浴室

クのマンハッタンとおぼしきビルの屋上に据えられた円形の木製の浴槽に五、六人の男女が一緒に入浴してお酒を飲んでいるものであった。まさに、日本の入浴方法であり、中世ヨーロッパの入浴方法である。

ポーランドのワルシャワで1981年から混浴のサウナが作られ、毎回百人を超す男女が集まるという新聞記事を読んだことがある。他人と一緒に入浴するといった行為は心を開き、お互いを認めあい、信頼しあわなければ無理である。

以上、二つの例からみられる、数名から多人数で入浴はこれからの入浴方法を占めているようでもある。

4. まとめ

今後どんな入浴方法が残り、更に世界的に盛んになる入浴方法はどんなものであろうか。結論を先に言ってしまうとシャワーを浴びる方式であろう。今まで、あまり入浴好きでなかった欧米の人達、雨が多く降らない中近東の国々、アジア諸国、南米諸国など、簡便なシャワーの普及によって、どこの国でもシャワーが日常的になってきた。世界的に人間が清潔になってきたのである。手足や体を拭くだけですませていたり、かけ湯だけだった国でも、現在はシャワーが行き渡っている。また、欧米では朝シャワーを浴び、日本では夜が多い。これは気候による影響と思われる。

今後、絶えることなく存続する入浴方式を考えると、日本式風呂（蒸気風呂とつかり湯併用型）は風呂好きの日本に、サウナ（熱気浴式蒸し風呂）は北欧圏に、ターキッシュバス（蒸気式蒸し風呂）は宗教の影響のもとにイスラム圏に残って行くと考えられる。

それでは、これから、ますます、盛んになるであろうシャワー式入浴について、アンディ・ルーニ（新聞のコラムニスト）が「人生

と（上手に）つきあう法」（晶文社刊）「バスタブ」というタイトルで書いたものを引用させてもらい、これを読んで、新しいシャワー式入浴文化が確立したと考えたい。

「アメリカ人なら誰しもがバスタブを持つという考えに胸を躍らせるが、残念ながらもはやほとんどバスタブのなかで入浴しない。代わりにシャワーですませる。バスタブはいまではせいぜいシャワーを浴びるときにつかう一時しのぎの場所になっている。バスタブの出入りに、気品をもって優雅にこれを行うのうことはむずかしい。カーテンをどういふふうにかけてみても、水は床中に飛び散ってしまう。」
 「私の家にはバスタブがふたつある。しかし、過去二十年間にそこで家族が入浴したのはせいぜい多くとも五十回である。私の家のブルドッグのギフォードは一階のバスタブで、それこそ何百回も風呂にいれてもらっているから、そこはもう「ギフィーの風呂」ということになっている。一度シャワーになれてしまうと、わざわざ風呂に入るのは骨が折れる。過去十年間にほんの数回風呂に入ったことがあるが、そのときは、汚れや石鹸がまだどれくらい体についているだろうかと、疑心暗鬼で湯からあがったものだ。風呂に入った後は、必ずといっていいほどシャワーを浴びたくなる。確かに風呂に入ることには贅沢な面もあることは否定できない。バスタブのなかでは、暖かく、体が軽くなったような感じがする。残酷な冷たい外の世界との軋轢から、もしかしたら逃れるような気分にもなれる。お湯につかって、かすかに波をたてる湯面を眺めながら、そこに横になっているのも気持ちがいい。お湯がぬるくなってきても、なんとかしてお湯のなかから出ずに、足を使ってお湯の蛇口をひねろうと悪戦苦闘するのも楽しい。

しかし、そんな、入浴に関するいいところも、その悪の点にはとてもかなわない。まず浴槽の掃除は冗談ではすまされない。すくなくとも、自分の体を洗った後すぐにやりたくなるようなことではない。また、どうして排水口の反対側に蛇口があるようにバスタブができていないのかも私には理解できない。蛇口と排水口が同じ側にあるために、風呂の掃除のときは、水が滝のようにまっすぐに排水口に落ちて

いくなかで、浴槽を洗うべく悪戦苦闘しなければならないことになる。きれいな水を押しもどしてしまうので汚い水は流れていかないし、新しいきれいな水で洗い流したいところには水がぜんぜんいかない。ところで、私がこれまでに見たなかでももっとも愚かしい応急処置が、いまではどこの家へ行っても見られるようになった。シャワーは浴びたいが、バスタブを出たり入ったりするのはすべて危ない。それでもそれを取り除く気にはなれない。そこでバスタブの底には、表面がやすり状になったマットが置かれる。たしかにそうすればより安全にはなるだろうが、もうそこを浴槽として使うことはできない。そうなったら、わざわざ風呂に入って、波形をつけたやすりマットの上に座っている馬鹿もいないだろう。ほとんどのホテルの浴室にはシャワーとバスタブが両方ついている。そして、バスタブの底には例のマットがしいてある。後何年かたてば、ホテルの浴室ではだれも風呂になど入らなくなることはまちがいない。ほかの人間がみな立っていた場所などにだれも座りたいとは思わないだろう。」

以上長々引用させてもらったが、大部分のアメリカ人の入浴がシャワーに傾くのも納得できる。それは、筆者が一年間アメリカで生活して体験した結果、まず気候が乾燥していて汗をかいてもシャツにべとつかずすぐ乾き、毛穴がふさがれた感じがしないこと、冬は住宅の中が全館暖房になり、シャワーでもそれほど寒いと感じない。これが日本なら冬のシャワーは体があまり暖まらない。

アメリカで日常的な入浴は完全にシャワー方式がとられ、入浴による心の解放といった快適さはほとんど考えられていないようである。しかし、カリフォルニアン・バスといった日本式入浴方法が少しづつ浸透している。また、日本でも1970年以降内風呂にシャワーを設備することが盛んになった。1990年代には、その簡便さと、昨今の異常なほどの清潔嗜好によって、若者の間ではシャワーが好まれ、「朝シャン」なる流行語にまでなるほど、朝出掛ける前に頭髪を洗う習慣が日常化した。

また、代表的な入浴方法を見てくると、以下

のような宗教の違いによって大きく入浴方式が分類できると考える。

〔1〕 仏教圏の入浴方式

- (1) インド（ヒンズー教が中心であるが大乗仏教の影響を受けているので広域にとらえた）、タイは河の中で宗教的な沐浴。日常はかけ湯方式。
- (2) 中国は大きな国なので地方によって違いがあるが、「中国語図解辞典」（大修館）によれば都市では西洋式にシャワーが主で最近バスタブを設置するようになった。また、都会には銭湯もあるが男性専用のものである。図を見ると大勢ではいる浴槽はあるが、日本の銭湯のような洗い場がなく、壁際に、多数のシャワーと洗面台が設置されている。入浴後マッサージを受けたり、足の手入れをしてもらえるようになっていて、イスラム圏のハマムの影響がある。共栄学園短期大学の中国語担当の池上貞子先生にうかがったところによれば女性は家庭内にあるシャワーですませる。また、農村では一般に個人の家庭にはお風呂はなく、そのかわり、とてもよく体をふいたり、毎晩、お湯で足を洗うとのことであった。
- (3) 韓国は儒教が普及した李朝以後、肌を人目にさらすことに神経を使う民俗である。また、韓国の気候は日本に比べて大陸性で、梅雨期を除いて、からっと乾燥している。昔は大きな家にも浴室がなかった。伝統的な韓国の住宅の平面図を見ると浴室・洗面・トイレの場所が確かに見当たらない。近くに河があれば河で、後は体を拭いたり、足を洗うといった中国式であった。現在の住宅では欧米式の一体型サニタリーになっている。暖かい季節は朝晩シャワーを浴びる。寒さが厳しくなると、最近非常に数が増えたサウナやヘルスセンター的な施設を利用するのが一般的なようである。
- (4) 日本は入浴前に洗い場で、まず体の汚れやすい部分を軽く洗ってから、38～41度位にわかした湯をためた深めの浴槽のなかにしゃがんで体を肩まで沈めて入浴する。人によって時間は

まちまちだが、浴槽にゆったり浸かって体を暖め、皮膚を柔らかくした後、洗い場に出て今度は洗い場からからだの隅々まで石鹸で洗い、湯船から桶で湯をとって体についた石鹸気を十分洗い流した後また、湯船に身を沈め気分をリラックスさせるといった方法がほとんどではないかと思われる。湯から上がる時昔は上がり湯からきれいな湯をくみ出して体にかけていたが、最近ではシャワーになった。そして、後に入る人のためにお湯を汚さないよう手ぬぐいやタオルを浴槽に入れないようにとか、湯面の垢をきれいにすくいだし、床と洗い桶の石鹸気を洗い落とし、桶は水気をとるために伏せて、出るように晒けられた。だから同じ湯に何人も人が入って不潔だと外国人に言われるが、そんなことはないのである。このように、日本の入浴方式は他の仏教圏の方式のようにかかり湯もしてそのうえお湯につかり、お湯の蒸気も利用するといった三種類の入浴の組み合わせともいえるようである。

〔2〕 イスラム圏の入浴方式

イスラム教では入浴をかならずしなければならない掟と結び付けて細かく規定している。

- (1) トルコ・イラン・アラブ系諸国の現在の住宅には湯船がなくともシャワーは必ず備付けられている。その他に数は減ったが公共浴場があり蒸気風呂の伝統を守っている。
- (2) インドネシアでは早朝仕事に出掛ける前と、夕方の四時ごろ入るのが習慣になっていて夜遅く入ると病気になるという言い伝えがある。日本にホームステイしたインドネシア人が自分自身の肌を直接あらわに見るのがはばかられ、電気を消して衣服を脱いで入浴していたとのこと。また、インドネシアでホームステイした日本人が浴室の水をためてあった湯船に体ごと入ってしまった。水道からでる水の量が大変少ないので、日常的に体にかけて浴びるだけの入浴方法なので、入れ替えるのに時間がかかり、一日つかえなくなり、たいへんな迷惑をかけたとのこと。

〔3〕キリスト教圏の入浴方式

(1) 教会の権力の強かった、中世ヨーロッパでは入浴を謳歌していた。公共の風呂を借り切って、会食や音楽とともに婚礼の祝いを男女で入浴しながら行っていた。当然、風紀が乱れて教会が禁止したり、その後の宗教改革やペストの流行で浴槽に体を入れる現在の入浴方法は途絶えてしまった。もちろん、ヨーロッパには色々な国があるので入浴の方法に違いがある。例えば北欧圏ではサウナが盛んである。しかし、フランスやイギリスでは体をふく、顔を洗うといった程度のもので、長いこと過ごしてきた。キリスト教には入浴に関する細かい教義がなかったようである。

以上、宗教が大きくかかわってきた、イスラム圏と仏教圏には昔ながらの入浴方法を残しているが、家庭の中ではシャワーというかかり湯方式が世界的主流になっている。どこの国でも入浴の方法はシャワーという共通の入浴になりつつある。簡便で場所を取らない。いつでも浴びることができる。使用水量が少ない。などの理由で全世界同じ入浴習慣が21世紀に向かって動きだしている。

つまり、世界地図の中にシャワー文化圏が大きくひろがり、部分的に蒸し風呂文化圏が色分けされ、日本式風呂文化圏が日本の地図上に点で示される、といった図式が展開される。ただ、アメリカのごく一部分に日本式風呂文化圏がカリフォルニア・ホットバスと名前をかえて地図の中にいかに表現されるかが今後の楽しみである。

5. むすび

日本の入浴史をたどってみてはっきり確認されたことは本当に心から入浴好きの国民であるということを確認させられたことである。この、最大の原因をあげてみる。

〔1〕日本で入浴が過去から現在まで盛んであった原因

- 1) 夏の蒸し暑い独特の自然環境
- 2) 火山国のため温泉・鉱泉が非常に多い
- 3) 暑さのため裸に近い状態で暮らしていたので、人前で裸になることは恥ずかしいことではなかったこと（過去に日本にきた宣教師、長崎出島のオランダ人、開国を迫ったペリー総督の一行の書簡、大森貝塚を発見したエドワード・モースなどによって書かれている）
- 4) 仏教を布教するための手段としての施湯
- 5) 好奇心が強く新しいものにすぐ挑戦したり体験したがる国民性（様々な絵巻物の中に描かれている、見物している好奇心にあふれた庶民の生き生きとした顔や動作からうかがい知ることができる）
- 6) 西欧人と比べて皮膚が強いため熱い湯に入ることができたことにより、伝染病などの菌が殺菌され、共同入浴のこわさがなかったこと
- 7) 浴槽のお湯を汚さないように洗い場で体の上下、前後をあらかじめ、簡単にすすいだり、洗ったりする躰がされていたこと
- 8) 内湯では水汲みが大変であったため、労力の軽減と燃料節約のため親子で一緒に入ることによって愛情を深めたこと
- 9) 銭湯ではおしゃべりによる情報交換、浄瑠璃をうなる、裸で身分が分からない解放感、飲食したり、碁をうったりといった娯楽性などで心がなごみリラックスできたこと
- 10) 浴槽や、火の炊き方など色々な発明工夫、改良を行い、誰にでも簡便に入浴できるよう創意工夫が行われたこと。

〔2〕西欧で入浴が盛んになったり、途絶えたりした原因

- 1) 夏の気候が日本のように蒸し暑い不愉快さではなく、乾燥しているため、切実に入浴したいといった気持ちが希薄である。（欧州を旅行してみるとブラウスやワイシャツの衿が汚れないことに驚かされる。また、汗をそれほ

- どかかない)
- 2) コロンブスの新大陸発見によってもたらされた、性病によって共同入浴や混浴の習慣がなくなった
 - 3) 水道設備がなかった時代にもロンドンやパリなどの都市には集合住宅があり、上階に住む人たちにとって水汲みが不可能にちかかった。(トイレはおまるをつかい排泄物を窓から下の道路にこぼしていたため道路は汚れ、ときには通行人が汚物を頭から浴びてしまうことが多かった)
 - 4) 水売りがいて飲料水を買うもので経済的に負担がかかった
 - 5) 清教徒の厳しい宗教観によって混浴はもちろんのこと、家族でさえ一緒に入浴することは許されなかった

最後にルース・ベネダイクトの「菊と刀」の第九章 人情の世界から引用する。

「日本人の最も好むささやかな肉体的快樂の一つは温浴である。どんなに貧乏な百姓でも、またどんなに賤しいしもべでも、富裕な貴族と全く変わりなく、毎日夕方に、非常に熱く沸かした湯につかることを日課の一つにしている。最もありふれた浴槽は木製の桶で、その下の木炭をもして湯を華氏110度またはそれ以上の温度に保つ、人びとは湯ぶねにはいる前に身体中をすっかり洗い清める。それから湯につかって温かさとくつろぎの楽しみに身をゆだねる。彼らは湯ぶねの中に胎児のような姿勢で両膝を立ててすわり、顎まで湯につかる。彼らが毎日入浴するのは、アメリカと同じように清潔のためでもあるが、なおそのほかに、世界の他の国ぐにの入浴の習慣には類例を見いだすことの困難な、一種の受動的な耽溺の芸術としての価値を置いている。この価値は、彼らの言によれば、年を取るにしたがってしだいに増大してゆく。

湯をたてる経費と労力とを節減するために、さまざまな方法が工夫されているが、とにかく日本人は何とかして湯にはいらずにはいられない。都市や町には水泳プールのような大きな公衆浴場があり、そこへ行って湯につかり、湯の中でたまたまいっしょ

になった人と交歓することができる。農村では近隣所の数人の女がかわるがわる中庭で風呂を焚きつけ、日本人は入浴中ひとに見られても少しも恥ずかしがらない。その女たちの家族が交代で湯にはいる。たとえそれが上流の家庭であっても、家族は常に厳格な順序を守ってつぎつぎに家庭風呂にはいる。まず第一にはお客様、次ぎにお祖父さん、次ぎに父親、次ぎに長男、以下しだいにさがって最後はその家の一番下の召使という順に。彼らは海老のようにまっかにゆだって湯からでてくる。そして一家団欒して、一日のうちで最も打ちくつろいだ夕食前のひと時を楽しむ。」

と書かれている。特に、受動的な耽溺の芸術と日本人の入浴方法を解説しているのは慧眼である。また、精神分析で有名なフロイドが「人間の住まいの始まりは、母親の胎内の安全で心地好い空間から出発し、大人になってもその時の安心立命の境地を無意識のうちに住まいに求めている」という趣旨のことを述べている。湯船の中は母親の胎内にいる時の姿勢に最も近いように、お湯を羊水と見立てることができる。ルース・ベネダイクトがフロイトの胎内回帰の願望を知っていたかどうか分からないが、日本人が湯ぶねの中に胎児のような姿勢で顎まで湯につかっている行為にたいして、“一種の受動的な耽溺の芸術”と称したのはまさしく、そこに胎内空間の安心立命の境地を感じ取ったからにはほかならない。フロイドが人間が無意識に求めている胎内空間を住まいに見立てたわけだが、日本人は無意識のうちに日本式浴槽を胎内空間に見立て、その入浴方法が胎内回帰をはかり、ストレス解消に役立てていたのである。

日本式入浴方法を体験した者はその精神的な安らぎや、血液循環が盛んになり、筋肉が緊張から解放されて弛緩していく心地よさ、また、家族で一緒に入るほのぼのとした心なごむひととき、銭湯や温泉での他人に対する関係が平等で無防備な裸の付き合い、などによって忘れられないものになる。だからこそ、米国でカリフォルニア・ホットバスが広がっていくのである。

これからの入浴は世界的にはシャワーに席卷されると考えられるが、靴を脱ぐという行為と共に、少し熱めの浴槽の中にとっぷりと肩までからだを沈める入浴方法は決して消えないと考える。

しかし、最近住宅が狭くなり、一人で入るのがやっとといった狭くて小さな浴槽に入り慣れた子供が多くなった。そのために、修学旅行などで他人と一緒に裸でお風呂に入れない子供が増加しているといった新聞記事を読んだことがある。そうすると、複数の人達と一緒に入浴は消えてしまうのかとも考えてみた。最近、浴室の設備が色々と改善されたり、楽しく入浴する工夫がされていること、入浴グッズ関連商品がよく売れて、専門店が増加していること、などを考え合わせると、多少個人的な入浴に対する興味や思い入れが強くなっているのかもしれない。それでも、夫婦、親子、友達、ましてや銭湯や温泉では赤の他人といった複数の人たちと一緒に違和感なく入浴する、といった行為は日本独特の習慣として存続するのではないかと考える。

《参考文献》

- 『洗うて浄めて・洗いの文化誌』横山鹿之亮 西田書店 1990
- 『インテリアは暮らしの舞台』川嶋幸江 三水社 1985
- 『韓国現代住居学』ハウジング・スタディ・グループ 建築知識 1990
- 『韓国人と日本人』金容雲 サイマル出版会 1983
- 『菊と刀』ルース・ベネディクト 社会思想社 1982
- 『キモノ・マインド』バーナード・ルドルフスキー 鹿島出版会 1974 S.48
- 『暮らしの思想』加藤秀俊中央文庫 1978
- 『「湿気」の日本文化』神崎宣武 日本経済新聞社 1992
- 『さあ横になって食べよう・忘れられた生活様式』バーナード・ルドルフスキー 鹿島出版会 1985

- 『人生と（上手に）付き合う法』アンディ・ルーニー 晶文社 1985
- 『西洋温泉事情』池内紀編著 鹿島出版会 1990
- 『世界風俗じてんⅠ・Ⅱ』磯見辰典他 三省堂
- 『銭湯へいこう・イスラム編』八尾師誠 TOTO出版 1993
- 『入浴・銭湯の歴史』中野栄三 雄山閣 1984
- 『「入浴」はだかの風俗史』花咲一男・町田忍 講談社 1993
- 『日本のすまい内と外』エドワード・S・モース 鹿島出版会 1981
- 『風呂と湯の話』武田勝蔵 塙書房 1980
- 『風呂のはなし』大場修 鹿島出版会 1987
- 『風呂トイレ賛歌』ローレンス・ライト 1989 晶文社
- 『湯かげんいかが』森崎和江 東京書籍 1982
- 『留学生日本フシギ体験』池口眞寿美 TOTO出版 1990